

『伊曾保物語』 授業実践報告

—「アリとセミ（キリギリス）」の解釈をめぐる—

学習院大学文学部教授
鈴木 健一



本務校で、主に一年生向けに講義をしている「日本文学史概説」では、学生たちに親しみを持ってもらえるように、どうぶつを切り口にしている。たとえば、『南総里見八犬伝』の八房とか「芭蕉の詠んだどうぶつたち」とか『義経千本桜』の狐忠信といった感じである。

一 『伊曾保物語』

ここでは、江戸時代初期の仮名草子で、『イソップ物語』を翻訳した『伊曾保物語』の授業をどのようにやっているか、その一端をご報告したい。

下——「蟻と蟬の事」を読んでみることにしよう。

去程に、春過夏たけ、秋も深くて、冬のころにもなりしかば、日のうらくなる時、蟻穴より這ひ出、餌食を乾しなす。蟬きたつて蟻と申は、「あないみじの蟻殿や。かゝる冬ざれまでも、さやうにゆたかに餌食を持たせ給ふものかな。われにすこしの餌食をたび給へ」と申ければ、蟻答云、「御辺は、春秋の営みにはなに事をかし給ひけるぞ」といへば、蟬答云、「夏秋身の営みとては、木末にこたふばかりなり。その音曲に取り乱し、ひまなきまゝにくらし候」といへば、蟻申けるは、「今とてもなご歌ひ給はぬぞ。謡長じてはつるに舞とこそは承はれ。いやしき餌食をもとめて、

何にかはし給ふべき」とて、穴に入ぬ。

そのごとく、人の世にある事も、我力におよばんほどは、たしかに世の事をも営むべし。ゆたかなる時つゞまやかにせざる人は、貧しうして後、悔ゆる物なり。さかなる時学せざれば、老て後悔ゆるものなり。酔ひのうちに乱れぬれば、醒めての後悔る物なり。返々も是を思へ。

（本文は『日本古典文学大系 仮名草子集』による。）

「いみじ」は、大変立派な。「冬ざれ」は、冬の最中。「御辺」は、あなた。「つゞまやか」は、儉約。「こたふ」は、「うたふ」の誤りか。

一読すればわかるように、これは現代のわれわれには「アリとキリギリス」として馴染み深いものである。それがどうして蟬になっているのだろうか。

じつは、もともとは蟬なのである。そして、イソップ寓話が成立したのはギリシャなのだが、それが北ヨーロッパに伝播した時に、そこには蟬がいなかったの、きりぎりすに改変されたものが、明治時代以降、日本で翻訳されて広がつたのである。そんなことを学生たちに説明すると、とても面白いと感じてもらえるようだ。

二 『エソポのハブラス』

ところで、イソップ寓話の日本での翻訳としては、『伊曾保物語』以前に、キリシタン版が

あった。ローマ字綴りの『エソポのハブラス Esopo no Fabulas』がそれである。イエズス会の宣教師が、日本語学習と布教のために著したと考えられている。

同書から、「蟬と、蟻との事。」を読んでみた。

或る冬の半に蟻ども数多穴より五穀を出て日に曝し、風に吹かするを蟻が来てこれを貰うた、蟻の言ふは、「御辺は過ぎた夏、秋は何事を営まれたぞ？」蟻の言ふは、「夏と、秋の間には吟曲にとり紛れて、少しも暇を得なんだによつて、何たる営みもせなんだ」と言ふ、蟻「げに、その分ぢや、夏秋歌ひ遊ばれた如く、今も秘曲を尽されてよからうず」とて、散々に嘲り少しの食を取らせて戻した。

下心。

人は力の尽きぬ中に、未来の務めをするところが肝要ぢや、少しの力と、暇有る時、慰みを事とせう者は必ず後に難を受けいでは叶ふまい。

(本文は、『日本古典全書 吉利支丹文学集 (下)』による。)

この話において、『伊曾保物語』と『エソポのハブラス』には、大きな違いがある。前者では、夏秋の間音曲に夢中だった蟬に対して、蟻は何も与えない。しっかり働かないとひどい目に遭いますよという教訓なのだ。ところが後者

では、蟻は蟬に穀物を少しだけ分け与えている。理由はどうであれ困っている者を見捨てられないということなのであろう。

私の授業では、前者を「自助努力」を推奨するもの、後者を「相互扶助」を推奨するものとして、学生たちに「あなたならどちらが良いと思いますか？」と問うてみる。それに対する彼ら彼女らの反応はじつにさまざまで、

・ 努力もしていないのに分け前だけ貰おうとするのはずるい。

・ 困っていたら助け合うべきだ。

という幅の中で揺れ動く。「先生ならどうするのですか？」とも聞かれるので、私は、「基本的に自助努力であつてほしい。私も、自分で仕事をして自分の食べる分は稼ぎたい。でも、もともとハンディがあつたり、病気になったりして、困っている人もいるよね。それは本人のせいじゃないだろう。私だって、いつそういう立場になるかもしれない。だから、社会の中には相互扶助もあつてほしいなあ」と答えている。

以上のような討議を経て、翌週、「あなただったら『アリとキリギリス』の話をどのようにリライトしますか？」という問いを発して、書いてもらう。そして、よく書けているものは、さらに翌週名前を伏せて皆の前で発表している。

受験勉強では、試験で一つの正解を出すことが求められるわけだが、大学に入ったら、答が

一つとは限らないものに取り組んでほしい（もっとも最近の教科書では、話し合いをさせて、さまざまな解を見出そうとさせる工夫がなされているようなので一概には言えないかもしれないが）。

そもそも実社会ではすっきり答が一つに決められないことも多い。複数の解に対して、知識と経験を経験を総動員して、もろもろの条件を丁寧に検討し、最善解を見付けられる力が無いと、社会に出てから生き抜いていけない。

学生たちにはそんなことも、ことばの技術を高めながら、会得してほしい、そう思いながら私は授業をしている。

【参考文献】加藤康子・三宅興子・高岡厚子『イソップ絵本はどこからきたのか 日英仏文化の環流』（三弥井書店、二〇一九年）は、『イソップ寓話集』の受容について、最もよくまとまった研究書である。「アリとキリギリス」のさまざまな展開にも詳しい。

池上彰・佐藤優『人生に効く寓話』（中公新書ラクレ、二〇二四年）でも、「アリとキリギリス」について取り上げて、現代的な意味を探究していて興味深い。佐藤氏も、この話を教材にして、学生に「あなたがアリだったら、訪ねてきたキリギリスをどうしますか？」と問うている。